長野県短期大学紀要　第64号　2009年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No.64, December 2009
長野県短期大学
〒380-8525 長野市三輪 8-49-7

言語表現に見られる主体性
－ラレル構文を例に－

Subjectivity in Linguistic Expressions:
With Special Reference to *Rare*-Constructions in Japanese

町　田　　章　MACHIDA　Akira

1. はじめに

認知言語学において、言葉の意味は、認知主体と外界との相互作用に基づく概念化であると規定されている。このように考えると、言語表現の意味を考察する際には、認知主体がどのように外界を捉えるかということが重要な問題となってくる。また、このような観点から言語間の対照研究を行うことは、母語話者の概念化の傾向を明らかにすることにもつながる。日本語と英語の対照研究には長い歴史があるが、このような研究から明らかにされる言語的な差異は、それぞれの母語話者の認知的な傾向の差異を表わしていることになる（池上 2006、中村 2004、森山 2008、山梨 2009、深田・仲本 2008）。本研究では、上記の諸研究で示された洞察を Langacker の認知文法の枠組みに位置づけることを試みる。それは、(1) の引用に端的に述べられているような問題意識があるからである。言語の普遍性と相対性に目を向け、海外の研究者にも理解可能な枠組みで有意義な貢献をすることが必要なのである。

(1)　英語を基にして定式化されたモデルあるいはメカニズムを無理矢理（例えば）日本語に当てはめるような研究も、あるいは反対に日・英語の違い（そして日本語の「特殊性」）のみを強調してよしとする態度もあまり実り豊かな成果は生まないであろう。大切なのは「言語の多様性」に真剣に取り組みながら「言語の普遍性」の探求に意義のある貢献を行うことである。（福井 2001:176-177）

福井のこの発言は生成文法理論を想定しているが、これは認知言語学にとっても大変示唆に富んでいる。福井は別の箇所でも、英語を基にして構築された生成文法の枠組み内において、その英語バイアスに囚われない姿勢の重要性を強調している。既存のモデルをそのまま鵜呑みにするのも問題ではあるが、差異を強調しすぎて同じ土俵で勝負することを避けると、逆に、生産的な議論ができなくなってしまうからである[1]。

生成文法と同様に、Langacker の認知文法も英語を基にして作られているため、それをそのまま日本語に無理矢理当てはめようとすると無理が生じてしまう可能性がある。これは当初から影山 (1996) が指摘している通りである[2]。

(2)　このことは、ビリヤードモデルを提案している学者が英語すなわち「スル型」言語を母語とすることに関連するかも知れない。英語的な発想からすれば、世の中の事象すべてに行為者ないし使役主が関与している（スル表現）と考えるのが自然だろう。しかし一方、日本語の「ナル型」の発想からすると、逆に、静止状態あるいは自然発生的な出来事のほうをむしろ基本として、使役主はそれに付加されたものと見なすという考え方もできる。(影山 1996:46-47)

上記の二つの引用を踏まえてここで強調しておきたいのは、研究の生産性を確保するために Langacker の認知文法の道具立てや理論的前提を共有しながらも、英語バイアスに細心の注意を払い、その上で建設的な提案を行っていくという研究態度である。本研究で提案される修正案は、事態内に視点を置くという日本語によく見られる事態把握の様式を認知文法の図式に組み入れることを目的としている。そして、この修正により、日本語に見られる

1　Croft(2003)が Radical Construction Grammar を提唱したのも、西洋の言語から得られた知見をそのまま無批判にあらゆる言語に適用しようとしたために生じた矛盾を根本から見直すためであった。

2　ビリヤードボールモデルで動詞の他動詞用法、自動詞用法、中間態、受動態を説明しようとすることに対する批判は、本多(2005)によってもなされている（本多 2005:111-112)。

ラレル構文の多義性に認知的な説明を与えることが可能となる。

2. 事態内視点

日本語話者と英語話者には、事態把握の様式において異なった視点をとる傾向があることはよく知られている。一貫して言われていることは、日本語は主観的に事態を把握する傾向の強い言語であり、英語は客観的に事態を把握する傾向の強い言語であるということである。ここで言う主観的な把握とは、認知主体からの「見え」をそのまま言語化する傾向が強いということであり、それとの関連で、認知主体を明示的に表現しない傾向も強いということである。有名なマッハの自画像に表されているように、人間の原初的な視覚経験には自己は映らないが、日本語ではそのような事態把握の様式を採用しているというのである。このように認知主体が明示的に表現されないということは、日本語では認知主体はエコロジカル・セルフとして捉えられる傾向が強いということである[3]。そして、(3) の引用において本多 (2005) が指摘するように、言語化されない認知主体は自身が表現されないことによって表現されているのである。

(3) 話し手自身を明示しないということは、話し手の存在が表現されていないということではない。むしろその逆で、話し手はその存在をエコロジカル・セルフとして捉えられ、ゼロ形によって表現されている。(本多 2005:154)

これに対し、(4) の引用にあるように、認知主体が明示的に表現されるということは、自己を客体化し分裂 (displace) して示すことにほかならない。自己が分裂して表現されるのは、認知主体が自らを客体化して把握した場合においても、その客体化された自己を観察するもう一つの視点を想定する必要があるからである。

(4) 話し手が一人称代名詞で表現されている場合、そこには見られる存在であり、指示される対象としての話し手と、見る存在であり、指示する主体としての話し手との間に、分裂が生じている。(本多 2005:154 傍線筆者)

一般に、上記のように認知主体が自己をエコロジカル・セルフとして把握するか、客体として把握するかという問題は、Langacker (1990) の主体性・客体性の議論と平行して論じられることが多い。認知主体が自己をエコロジカル・セルフとして認識している場合には、その認知主体は主体的把握 (subjective construal) を受けているといい、自己を一人称で明示的にプロファイルしている場合には、その認知主体は客体的把握 (objective construal) を受けているというのである。確かに、両者の議論は多くの点で共通していると思われる。しかし、実際には、大きな隔たりがあるのも事実である。例えば、(5) の例を見ていただきたい。

(5) a. 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。
b. The train came out of the long tunnel into the snow country.

(5) は、川端康成の小説『雪国』の冒頭部分の日本語表現とその英語訳 (E. Seidensticker による) であるが、この例では、日英語ともに認知主体が一人称として表わされていないという点で共通している。つまり、ともに本多 (2005) の言うエコロジカル・セルフで認知主体が把握されていると考えられる。仮に、Langacker の主体性の議論と平行性が見られるならば、両者において認知主体は主体的把握を受けているということになる。しかし、実際には、この両者から読み取れる事態は全く異なる。池上 (2006) によると、日本語の原文 (5a) では、見る主体の視点を汽車の中に感じ取れるのに対し、英語訳 (5b) からはそのような視点は感じ取れない。

3 エコロジカル・セルフに関する詳細な議論は本多(2005)を参照。

(5b) では、逆に、主体の視点は汽車の外に置かれ、そこからトンネルを抜けてくる汽車を描いている感じがするのである。このことは、両者では、視点の置かれる場所、つまり視座が異なることを示している[4]。

(5) の対比が端的に表しているのは、事態内に認知主体の視点が置かれているかどうかという問題であり、これは Langacker の主体性・客体性の議論とは性質の異なるものである。つまり、本多 (2005) が (6) のように述べていることは、本質的には Langacker の主体性・客体性の議論とは異なるのである[5]。

(6) 英語は状況を外部から見て表現する傾向が比較的強いのに対して、日本語は状況の中にいて、その現場から見えたままを表現する傾向が強い。(本多 2005:154-155)

本多 (2005) は、(6) の引用にあるような、状況内に認知主体の視座を設定する言語を状況没入型言語と呼び、日本語はこのような状況没入型言語であると述べている。同様に、中村 (2004) が I モードと呼んでいる認知のモードも、このように事態内に認知主体を位置づけ、認知主体と外界との相互作用に焦点を当てた認知モードである。

主体的把握を受けた認知主体の視点は事態内に置かれるという論理は、われわれ日本語話者にとっては自然な帰結であるように思われる。しかし、Langacker のいう主体的把握とは、客体的事態から一歩引いた位置から事態を観察する観察者としての認知主体を想定しているため、認知主体は常に事態の外に置かれることになる[6]。つまり、認知主体の視座は事態内には存在しえないのである。日本語のように事態内に認知主体が視点を置くという事態把握の様式は、むしろ、Langacker の言うところの客体的把握に相当するのである。

Langacker (1990) の主体性・客体性の議論の問題の根幹は、メガネのメタファーにある。Langacker はメガネをかけているときはメガネの存在を意識しないと述べ、このような把握の仕方を主体的把握と呼んでいる。それに対し、一端メガネを外すとメガネは知覚の対象として把握されるようになり、このような把握の様式を客体的把握と呼んでいる。このメタファーは理解し易いためによく用いられるが、このメタファーにおいては常に注意しておくべきことがある。それは、メガネを客体的に把握した場合には、このメガネを見ている認知主体も必ず存在するはずであり、その認知主体は、完全に主体的把握を受けているということである。つまり、本多 (2005) の言うように、認知主体の自己が分裂しているのである。Langacker のメガネのメタファーが表していたのは、メガネと身体の分裂、つまり、自己の分裂だったのである。そして、この認知主体の分裂した自己は、客体化した自己とそれを観察する主体的自己であるため、客体的自己は常に主体的把握の中に埋め込まれると考えられる。したがって、Langacker にとっての客体的把握は主体的把握の中に必ず埋め込まれることになる。

それに対して、日本語に見られる事態内視点は事態の参与者として認知主体が事態に関与しているにもかかわらず、自己の存在を意識していないというところが特徴となる。Langacker の議論に沿って述べると、認知主体は事態に関与しているという意味で客体的な把握を受けているが、決して意識に上らないという意味で主体的把握を受けているということになる。

上記の考察を整理すると図 1 のようになる。事態把握の様式は、認知主体の視座をどこにとるかという点で二つに分類できる。一つは、事態内視点であり、もう一つは事態外視点である。事態外視点は、

4 ちなみに、(5a)では、一人称のガ格名詞句(tr)が省略されている。言語化されていなくても tr は常に客体としてプロファイルされていると考えられることから、tr である認知主体は客体的把握を受けているともいえる。しかし、そのように考えると、(5a)は客体的把握を受け、(5b)の英語訳は主体的把握を受けているということになってしまう。これでは、日本語と英語から受ける直感的な印象とは正反対の観察となってしまう。

5 同様に、中村(2006)は Langacker の主体化のモデルに対し「ラネカー(1985)は、ステージモデルを基に、認知主体がオン・ステージから眺める場合とオフ・ステージ（観客席）から眺める場合の二つの認知モードを提示し、さまざまな現象を分析しているが、認知モデルとしては、主客未分のインタラクションが（重視されながらも）組み込まれていないのは、不十分だと言えよう」（中村 2006:77）と批判している。

6 もちろん、認知主体が完全に事態から離脱することは通常ありえないことは Langacker も認めている。

認知主体を分裂して把握するかどうかに基づいて、さらに二つに分類できる。一つは主体的把握であり、もう一つは客体的把握である。そして、事態外視点は、Langacker のいう主体的把握にも当たるので、図1では事態外視点の下に（主体的把握）と記されている。したがって、客体的把握は常に主体的把握の中に埋め込まれることになる。また、認知主体が事態内視点をとる場合にも、主体的把握と客体的把握が考えられるが、実際には、認知主体が事態内視点を取りつつ、かつ、客体的に把握されるパターンは存在しないと考えられる。したがって、図1の認知主体の分裂性の上から二番目の客体的把握は実際には存在しないことが予測される。

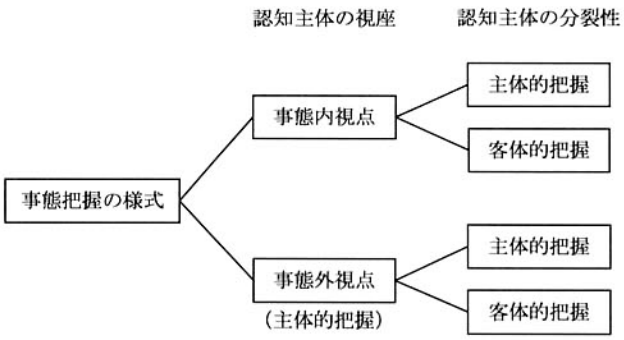


図1

3. 自己中心的視点配列

前節で述べた主体的把握と事態内視点の混乱は、Langacker の視点配列モデルに既に見られる。通常、主体性・客体性の議論の出発点として提示される最適視点配列 (optimal viewing arrangement) と自己中心的視点配列 (egocentric viewing arrangement) の議論に既に混乱が生じているのである。Langacker (1990) は、知覚者と知覚対象との関係を二つの異なった視点配列として図式化している[7]。Langacker は、知覚者が客体的状況 (objective scene) の外側に位置づけられる視点配列を最適視点配列と名付け、知覚者が客体的状況内に位置づけれられる視点配列を自己中心的視点配列と呼んでいる。最適視点配列は図2 (a) のように図示され、V は知覚者、P は知覚対象、破線矢印はそれらの間の知覚関係を表している。四角形で表されている PF は知覚者の知覚野全域を表しており、その一方で、OS は注視されている場であるオンステージ (onstage) を表している（また、これは客体的状況 objective scene を表しているともいえる)。この場合、知覚者 V は OS と PF の両方の外側にあるので、定義上、自己は知覚されない。、それゆえ、最大限可能な限り、知覚者 V は主体的に把握されており、知覚対象 P は客体的に把握されているといえる。

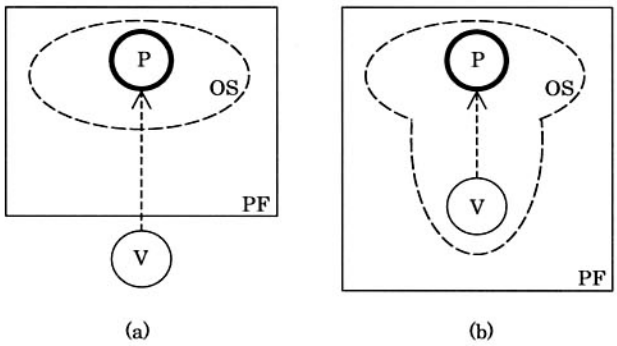


図2

一方、図2 (b) に表されているのは、自己中心的視点配列である。この図式に関する Langacker の説明を、少し長いが重要な箇所なので、以下に引用する。

(7) ...people are sometimes concerned with themselves and the relationships they bear to other entities. When this happens, V may not only be self-aware (hence included in PF), but can even go onstage, (a)taking its place within an expanded, egocentrically-determined OS region; at the extreme, (b)V can itself become the focus of viewing attention (V=P). Each step along this path toward focused self-examination increases the objectivity of V's construal and diminishes that of P. (Langacker 1990:8 傍線筆者)（拙訳：人間は時折自分自身

7　ここでは、Langacker(1990)の該当箇所が知覚のメタファーを用いてこの現象を説明しているために、知覚者、知覚対象といった用語を使用しているが、知覚をそのまま認知と置き換えて理解してかまわない。したがって、ここでの知覚者とは、認知主体のことである。

や、自分と他の存在物との関係について関心を示すことがある。このような場合、Vは自分自身を自覚している（したがってPFに含まれている）だけでなく、ステージ上に立つこともできる。その際、(a) Vは自己を中心として決定され拡張されたOS領域内に位置づけられることになる。極端な場合、(b) Vそれ自身が視覚的な注視の焦点になることもできる（V=P）。自己に焦点を当てていく段階が進むにつれてVの把握の客体性は増加し、Pの客体性は減少する。）

引用箇所から明らかなことは、Langackerは自己中心的視点配列を客体的把握の認知的動機付けとして位置づけているということである。つまり、認知主体は自己中心的視点配列においてプロファイルを受け、客体的把握を受けるのである。これは、認知主体が自己をプロファイル、または言語化しない日本語の特徴とは正反対の事態把握の様式であるといえる。

しかしながら、このようなLangackerの説明にもかかわらず、自己中心的視点配列が日本語型の事態把握様式の特徴であるという主張がなされることがある（山梨 2009:82-83、深田・仲本 2008:94-95）。確かに、自己中心的視点配列という名称は主体的把握を連想させるために、このような主張になるのかもしれない。また、知覚者がOS内に位置づけられるという引用部の表現から、認知主体が事態内視点をとる日本語との共通性も認められる。しかし、Langackerが自己中心的視点配列で主張していることは、認知主体が客体的把握を受ける際の認知的動機付けである。したがって、自己中心的視点配列を日本語型と考えると日本語型の事態把握は客体的な把握であることになってしまう。これは、通常、認知主体が言語化されない日本語の特徴を正しく捉えているといえるのであろうか。

このような混乱を招いた根源は、(7) の下線部 (a) にある。そこでは、Langackerは自己を中心にOS領域が決定され拡張されると述べている。このことは、まさに事態の傍観者としての認知主体ではなく、客体的事態と相互作用しながら事態を把握していく認知主体の認知作用のことを指していると考えられる。つまり、この部分だけをみると、確かに、事態内視点またはIモード認知を表しているように読めるのである。したがって、Langackerの自己中心的視点配列に関するこの記述は、認知文法の理論的枠組みにおける客体的把握のメカニズムを示す一方で、いわゆる一般的に"主観的"といわれている認知メカニズムを同時に組み入れているのである[8]。

上記のように理解した上で、自己中心的視点配列は事態内視点をとる日本語型の認知様式であると結論付けることも一見できるように思われる。ところが、続く (7) の下線部 (b) では、次のようにも述べられている。「Vそれ自身が視覚的な注視の焦点になることもできる（V=P）」つまり、自己中心的視点配列を推し進めていくと知覚者が知覚の焦点、したがって、プロファイルを受けるというのである。一般に、日本語の特徴は認知主体を表現しないことであり、英語の特徴は認知主体を表現することにあるといわれているが、この記述に従うと、日本語型であるはずの自己中心的視点配列を推し進めると逆に英語型になってしまう。これは非常に無理があるように思われる[9]。

以上の議論をまとめると次のようになる。Langackerのいう最適視点配列は主体的把握を表したものであり、自己中心的視点配列は客体的把握を表したものである。しかし、日本語の事態把握の様式である事態内視点をどちらかの視点配列と同一視することはできない。最適視点配列は、認知主体が主体的把握を受けるという点では日本語型であるが、事態内視点を表すことができない。逆に、自己中心的視点配列では、認知主体を事態内に位置づけ

8　Langackerのいう主体性と一般的に了解されている主観性は、全く異なる概念であることに注意する必要がある。主体性とは、認知主体が認知的際立ちを失い背景化される現象を表わしており、一般的に使われる主観性とは、認知主体が事態把握に関して積極的な役割を果たすこと表す概念である。

9　深田・仲本(2008)では「自己中心的視点配列では、主体は、概念化の対象となっている事態に関与しているにもかかわらず、その概念化の対象の中に自らを入れることはできない。これは、自分の〈見え〉の中に自分自身が入らないのと同じである。この場合にも、主体は、自らの存在を言語化することはできない。」（深田・仲本 2008:94）と述べているが、(7) の下線部(b)から分かるように、これはLangacker(1990)の説明とは明らか異なる。

ることが可能なため、日本語的な事態内視点を表現することができるが、これを進めると認知主体が客体的把握を受けることになり、認知主体が自己を客体化しない日本語型とは異なってしまう。

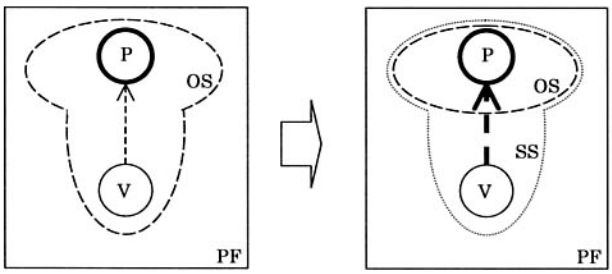
4. 主観的状況

前節の議論から、Langacker の視点配列のモデルをそのまま日本語の表現の特徴づけに用いようとすると内部矛盾を起こしてしまうことが分かった。本節では、この内部矛盾の根源を正す修正案を提示をしたい。

実はこの内部矛盾は (7) の引用箇所に発端がある。Langacker は、(7) の下線部 (a) において、「自己を中心として決定され拡張された OS 領域内に知覚者が位置づけられる」と述べている。これを図式化したものが図 3 (a) である。そこでは、認知主体である知覚者 V は破線で描かれた OS 内に位置づけられており、この OS は知覚対象の P だけでなく、V をも包含するように拡張されている。しかし、このように自己を中心として決定され拡張されるような領域はそもそも OS と呼んでよいのであろうか[10]。OS は、オンステージを表すとともに客体的状況 (objective scene) を表しているが、客体的状況とはそもそも認知主体が関与しない客観的領域だけに限定したほうがよいのではないだろうか。

この図式上の混乱を解決し、Langacker の意図するところを明示的に図式化するために、自己を中心として決定され拡張される領域を主観的状況 (SS: subjective scene) と名付け、OS と区別することを提案したい。この場合、OS は認知主体の関与を受けない純粋に客観的な状況として新たな意味づけが与えられる。

上記の提案に従い、自己中心的視点配列の図式に関して二点の改訂を行う[11]。一つは、純粋に客観的状況を表す OS と知覚者の双方を含む領域として主観的状況 SS を新たに設定したことである。これは、図 3 (b) において OS と知覚者を包含した点線で表されており、知覚者が自己を中心として決定した領域である。二点目は、この SS を直接スコープ (IS: immediate scope) とすることである。従来は、プロファイルは OS 内に厳しく制限されていたが、これは OS を IS と見なしていたからである。しかし、SS を IS と見なすように修正することで、図 3 (b) に示す知覚者、知覚対象、知覚者と知覚対象との関係 (relation) の三つをプロファイルできるようになる。これは大きな修正点であるように見えるかもしれないが、この場合の SS は従来の OS にあたるので、実質的な修正ではない。



(a) 従来型　　(b) 修正案

図 3　自己中心的視点配列

このような図式を提案する利点は二つある。一つは、これによって事態内視点を表現することができるようになったことである。これにより、認知主体がプロファイルされていないにもかかわらず、事態把握の成立に積極的に関与しているような日本語型の事態把握の様式が矛盾なく図式化できるようになる。二つ目は、これまでの Langacker の図式では厳密に表現するのが困難であった意味的な差異を明示的に図式化できるようになる点である。例えば、従来の図式では、(8) の例文の差異を記述する際には問題が生じていた。

(8) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica. (Langacker 1990:17)
　　b. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990:22)

10　Langacker は OS を onstage もしくは objective scene の略語として用いているが、そもそもここから混乱が生じる。ステージ上と客体的場面は必ずしも同一ではない。

11　本章の議論と同様の問題意識から、事態把握の様式の図式化を試みた研究に中村(2004)の I モード・D モード認知がある。図 3(b) は中村の I モード認知の図式をより Langacker の図式と親和性を持たせたものだと考えてよい

Langacker は、(8) の表す意味の差異を図 4 を用いて説明している。図 4 (a) が表しているのは、(8a) の across の意味である。ここでは、参照点 R である Veronica から見た、テーブル (lm) を越えた向かい側に Vanessa (tr) を位置づける心的走査が表されている。グラウンド G から出ている破線矢印はこの心的走査を図示したものである[12]。これに対し、図 4 (b) が表しているのは、(8b) の across の意味である。(8b) では、グラウンドが参照点 R となり、tr との位置関係を規定している。

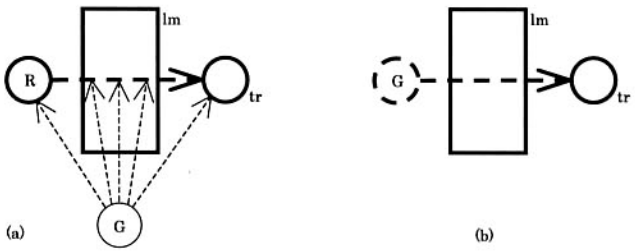


図 4　(Langacker 1990:18)

Langacker は図 4 (a) から (b) へ事態把握の様式の変化は主体化 (subjectification) であると主張しており、元々客体的把握を受けていた参照点が、主体的把握を保持しているグラウンドの一側面と同一視されるようになるときに生じるとしている。したがって、図 4 (b) では、参照点は G と標示されている。この図 4 (b) の図式を理解するのはやや困難である。それは、主体的把握を受けたグラウンド G が本来オフステージにありプロファイルを受けられないにもかかわらず、慣習的にオンステージと見なされるような位置に描かれているためである。このため、G は客体的把握を受けていると誤解されてしまう恐れがある。このような誤解を避けるために、(9) の引用にあるように、Langacker はこの G を破線で図示せざるをえなかったのである[13]。

(9) ...the circle representing it (G) is drawn with a dashed line to indicate a certain measure of subjectivity: as the position from which the scene is viewed, G itself is either at the fringes of the OS-region (not a focus of observation) or perhaps offstage altogether. (Langacker 1990:21) (拙訳：G を表している円は、主体性の程度を表すために破線で描かれている。この場合、場面を観察している位置として、G それ自体は OS 領域のはずれ、つまり観察の焦点にないか、または、完全なオフステージにある。)

Langacker が図 4 (b) のように描かざるをえなかった理由は、across で示されている G と tr の関係がプロファイルを受けているという事実を図式に明示するためには関係の矢印が OS 内になければならなかったからであろう。つまり、破線矢印を太線で描くためには OS 内に G がある必要があるのである。

これに対して、本稿で提案している図式を用いれば、このような無理は生じない。図 4 (b) はここで提案している図式を用いれば、図 5 (b) のように記述される。比較のために、図 5 (a) に従来の図式をそのまま載せてある。

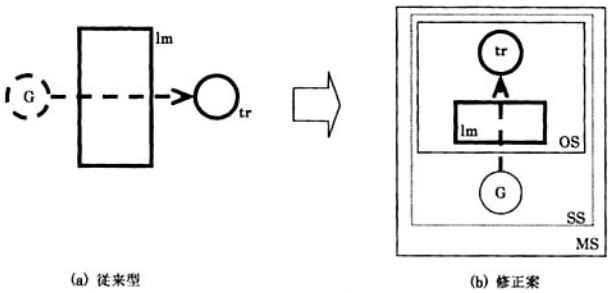


図 5

図 5 (b) では主体的把握を受けたグラウンド G が SS 内に位置づけられている。この SS 内では関係もプロファイルを受けることができるので、破線矢印は太線で描かれている。繰り返しになるが、修正後の図 5 (b) の重要な点は、認知主体と客体的事態との関係を図式化できるという点である。そして、この図 5 (b) で SS 内に G が位置づけられていることは、認知主体が事態内に視点を持っているという

12　図 4 では認知主体は C ではなくグラウンド G として表示されているが、G は C を包含する概念なので、原典にしたがい、ここではそのまま G としておく。

13　図 4(b)の図式にはそもそも初歩的なミスがある。G が主体的把握を受けているとしたら、プロファイルを受けていないことになるので、G を太線で表してはいけない。

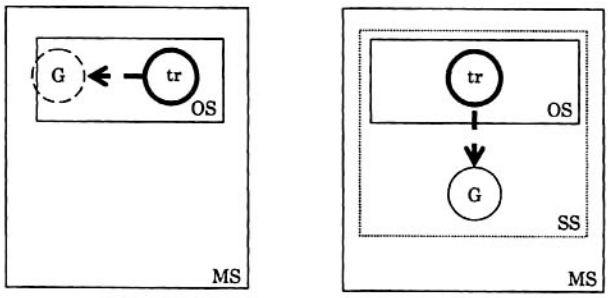
観察を明示的に図式化したことにもなる。これにより、本多 (2005) のいうエコロジカル・セルフもLangackerの図式に位置づけられ、中村 (2004) のIモードも正しく図式化できるのである。図5 (a) のような図式ではこのような観察は反映されない[14]。

この修正案の利点は、(10) のような認知主体の視点を積極的に組み入れた表現を図式化するときに最も発揮される。この表現においては、認知主体はエコロジカル・セルフとして積極的に事態把握に関係している。(10a) において「近づいてきた」というのは、あくまでも認知主体からの「見え」を表しており、実際に京都が動いているわけではない[15]。実際に近づいていっているのは、京都ではなく認知主体のほうなのである。したがって、(10a) の「近づく」は主体的移動を表しているといえる。

(10) a. 京都が近づいてきた。
b. ?京都が私に近づいてきた。

興味深いのは、この表現では認知主体は決して客体化されないということである。(10b) のように認知主体を客体化した表現が意味するのは、本当に京都が移動する場合、つまり客体的移動の場合である。認知主体を客体化した場合には客体的移動しか表せないのである。この事実は、従来の図式では説明不可能であるように思われる。従来の図6 (a) ではプロファイルはOS内に制限されているため、「近づく」というプロセスをプロファイルするためにGをOS内に位置づけるしかなかった。そのため、Gが主体的把握を受けていることを表すためにGを破線で表すしかない。そして、この図6 (a) ではGはOS内にあるので、Gが客体化されプロファイルを受けた (10b) のほうが自然であると予測される。しかし、この予測に反して (10b) は主体的移動を表す表現としては容認されないのである。

一方、修正案の図6 (b) ではGを中心に拡張されたSS内にGが位置づけられ、「近づく」という現象が、認知主体による「見え」によって生じた移動であることが適切に図式化されている。SSとはまさにそのような事態を図式化するために設けられた領域なのである。この図6 (b) から予測できるのは、認知主体を客体化しOS内に位置づけると「近づく」という事態は認知主体の「見え」によって生じた事態であるという解釈が消えてしまい、客体的な移動、つまり (10b) に示すように、本当に京都が認知主体に向かって物理的に移動してきたことを意味するようになるのである。



(a) 従来型　(b) 修正案

図6

5. 自発、可能、受身、尊敬のラレル構文

最後に、前節で提案された図式を用いて日本語のラレル構文の多義性に見られる事態把握の基盤を明らかにする。一般に、日本語のラレル構文には、以下の四つの用法があるといわれている。(以下の例文はすべて川村 (2004) からの引用である。)

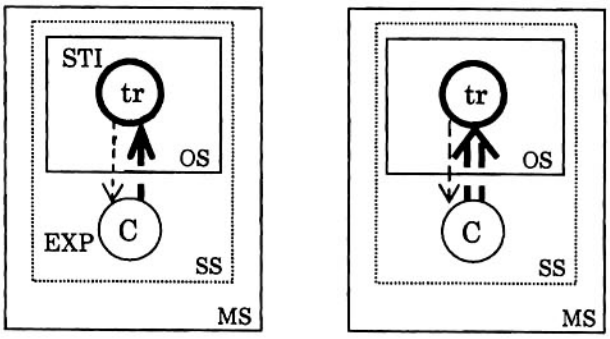
(11) a. 太郎が次郎に助けられた。【受身用法】
b. 居眠りをしている学生がちらほら見られる。【自発用法】
c. 次郎はブルーチーズが食べられる。【可能用法】
d. 山田先生が大阪へ出かけられた。【尊敬用法】

川村 (2004) によれば、なぜ「ラレル」という一つの形式がこれほどまでに異なった意味を持つようになったのかに関して有力な説はまだ出されていない。

14 客体軸と主体軸を書き分けることができることもこの図式の利点である。Langackerは主体化の議論をする際には必ず客体軸を水平に、主体軸を垂直にとる図式からはじめるが、その区別がこの新しい図式には生かされるのである。

15 「見え」とは、知覚者にとって状況がどのように立ち現れるか、ないしは状況がどのように経験されるかを捉えた術語である。(本多 2005:32-33)

そこで、本研究で提案している事態内視点のメカニズムを用いて、ラレル構文の多義の構造の背後にある事態把握の様式を明らかにしてみたい。まず、出発点として自発用法 (11b) の事態把握の様式を図式化してみよう。図 7 (a) において、tr である「学生」から主体的把握を受けた認知主体に対し与えられている視覚的な刺激 (stimulation) は破線矢印で、逆に認知主体から tr へ行われている理解 (apprehension) は破線太矢印で表されている[16]。STI は tr が刺激主であることを、EXP は認知主体が経験主であることを表わしている。



(a) 自発　　(b) 可能

図 7

図 7 (a) のような認知図式から (12a) のような可能表現への拡張は容易に想像がつく。(12a) は図 7 (b) のように図示され、tr から伸びている破線矢印はアフォーダンス (affordance)、逆に認知主体から伸びている二重破線太矢印は潜在力 (potency) を表している。「ブルーチーズ」が認知主体に対し「食べる」という行為をアフォードし、逆に、認知主体にはそのような行為を行う潜在力があることを表している[17]。この認知主体が客体化されてプロファイルされた場合には、(12b) のように表現され、図 8 (a) のように図示される。客体化によって分裂した自己は参照点 R として OS 上に位置づけられ、事態内の潜在力の出所と OS の外にある認知主体 C の両方と同一指示を受けている。そして、(12b) の事態把握は (12c) の事態把握の足がかりとなる。(12c) を図式化した図 8 (b) では、参照点 R はもはや認知主体 C と同一指示ではない。

(12) a. ブルーチーズが食べられる。
　　 b. 私は、ブルーチーズが食べられる。
　　 c. 次郎は、ブルーチーズが食べられる。

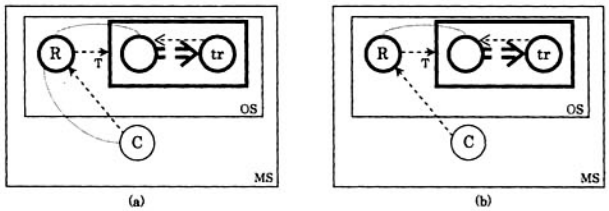


図 8

図 8 が図 7 と大きく異なっているのは、認知主体が完全に主体化され事態の傍観者的な役割に徹するようになったことと潜在力の出所が客体化されているため潜在力自体も客体的把握を受けるようになったことである。したがって、(12b,c) の事態把握では事態内視点がとられていないので SS が消滅する[18]。

興味深いことに、(12a-c) で生じていることは、明らかに Langacker の主体化の逆、つまり客体化 (objectification) である。Langacker (1990) では、事態参与者と参照点が一致している状況を出発点とし、その後、事態参与者と参照点が不一致になり、最終的にはグラウンドが参照点となる過程を主体化と呼んでいるが、ここでみられる拡張の過程は、ほぼこの逆の過程を経て客体的把握を受けるようになっている。つまり、日本語の場合は、客体的把握から主体的把握へというメカニズムを想定するよりは、むしろ、主体的把握から客体的把握へという客体化を想定する必要があるのである[19]。

16　刺激主と経験主の関係に関しては Langacker (2009:9)を参照。

17　一般に「可能」には状況可能と能力可能があると言われているが、図 7(b)における潜在力をプロファイルすれば能力可能を表わし、アフォーダンスをプロファイルすれば状況可能を表すことができる (川村 2004:116 参照)。

18　このような SS の消滅は、中村(2004)のいう脱主体化(de-subjectification)にほぼ相当すると考えられる。

19　Langacker の認知文法では、客体的把握から主体的把握へという主体化の流れが主張されているが、このように考えること自体、影山(1996:47)の指摘するように英語母語話者のバイアスがかかっているように思われる。本多(2005:275-276)に示唆されているように、主体的把握のほうがむしろ根源的な事態把握であり、主体的把握から客体的把握へという客体化を想定したほうがむしろ理に適っている可能性がある。

次に、この図8は受身用法への拡張の足がかりとなるが、その前に可能のもう一つの用法である意図成就について触れておきたい。川村 (2004) によると日本語文法で「可能」と呼ばれている意味の中には(13)に示すような意図成就の用法がある。

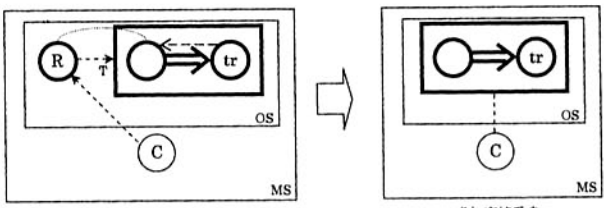
(13) 耳を澄ますと、2階の物音がはっきりと聞き分けられた。(川村 2004:117)

(13) に示すように、この場合の「ラレル」は潜在力ではなく、意図した行為が意図どおりに実現したことを表している。つまり、可能用法においても、典型的な受身文にとって重要な役割を果たすエネルギー伝達を表すことができるのである。意図成就用法を図示した図9 (a) において事態内の二重矢印が破線ではなく実線で描かれているのはこのためである。

そして、その上で、この意図成就 (14a) の可能用法から直接受身 (14b) へと拡張したと考えたい。

(14) a. 太郎はそのきのこが食べられた。
b. 金魚が鯉に食べられた。

意図成就を図式化した図9 (a) から直接受身を図式化した図9 (b) への拡張は自然に予測できることである。ともにガ格で表されたtrは被動作主patientであり、図9 (a) の参照点Rは事態内の動作主と同一指示されているからである。そして、意図成就用法で描かれているアフォーダンスを表す破線矢印が受身文においてはかなり背景化されるものと思われる[20]。



(a) 意図成就　(b) 直接受身

図9

最後に、最もつながりの見えにくい尊敬用法について考察する。なぜ尊敬が最もつながりが見えにくいかというと、自発、可能、受身では行為対象または知覚対象がtrとして把握されているという共通点があった。それに対し尊敬では、行為の主体（典型的には動作主）がtrとして把握されている。そのため、能動文と受身文の交替に生じるような格の交替が、尊敬表現と非尊敬表現の間には起こらないのである。(15) は能動文と受身文の対比であるが、態の交替に伴って格が交替している。それに対して、(16) は非尊敬文と尊敬文の対比であるが、そのような格の交替は見られない。

(15) a. 先生が太郎を褒めた。
b. 太郎が先生に褒められた。

(16) a. 先生が映画を見た。
b. 先生が映画を見られた。

このようなような事情もあって、尊敬を他の三つ（自発、可能、受身）と関連付けて論じるのは非常に困難であった。特に、ラレルの四用法における格関係の差異に目を奪われると、全体の関連性が見えてこないのである。

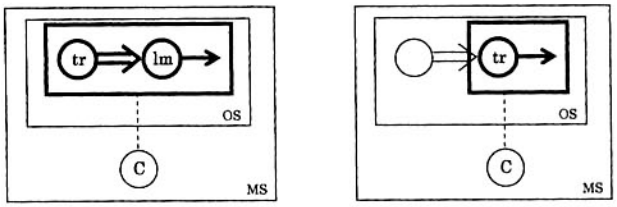
このような問題を解決するために、まず確認しておく必要があることがある。(17) は自動詞と他動詞の交替を表している。そして、特に、(17b) のような自動詞は非対格自動詞と呼ばれている。

(17) a. 太郎が木を倒す。
b. 木が倒れる。

図10はそれぞれ (17) の他動詞文、非対格自動詞文に対応している。(17a) と (17b) の違いは、同じアクションチェインをベースとして、異なるプロファイルが与えられていることである。(17a) は動作主「太郎」が被動作主「木」に対して何らかのエネルギー伝達を行い、その結果、被動作主の状態に変化が生じたところまでをプロファイルしている。それ

20 厳密に言えば、行為の対象は行為をアフォードしているはずであるから、この破線矢印が完全に消えてしまうことはない。つまり、人間が動作主であるすべてのアクションチェインには逆向きの破線矢印は必ず存在しているのである。しかし、アフォーダンスが問題とならない場合には、煩雑さを避けるため図式には表さないことにする。

に対し、(17b) は、動作主、及び、エネルギー伝達自体をプロファイルせず、被動作主とその結果の状態変化のみをプロファイルしている。そのため、(17b) では、この事態把握内において最も際立ちを持った要素は被動作主「木」であり、これが tr としてガ格で表示されている。そして、一般に、このような非対格自動詞の tr は非意図的主題 (theme) を表わしているといわれている。したがって、(17a) においては被動作主であったヲ格参与者「木」が、(17b) においてはガ格表示を受け、非意図的な出来事の主題として描かれているのである。

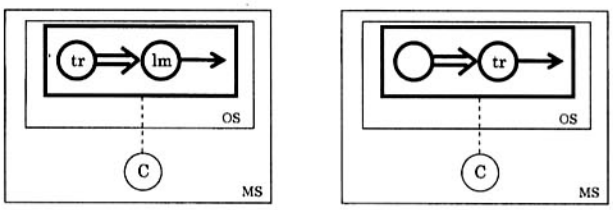


(a) 倒す　(b) 倒れる

図 10

実は、ラレル構文にもこれと同様の働きがある。つまり、エネルギー伝達の着点を tr とする働きである。能動文である (18a) ではヲ格はエネルギー伝達の着点であるが、受身文である (18b) ではこの着点がガ格表示されている。これは、ガ格参与者の意図とは無関係に「殴る」という出来事がガ格参与者の身に起こったことを表している。これを図示すると図 11 のようになる。

(18) a. 太郎が次郎を殴った。
　　 b. 次郎が殴られた。



(a) 能動文　(b) 直接受身文

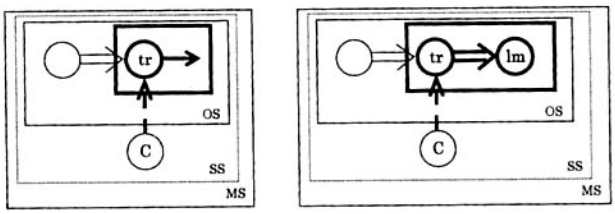
図 11

このように考えると、(19) のように尊敬を表すラレル構文においても同じ認知的メカニズムが働いていると考えてもよいように思われる。つまり、「先生」が非意図的「休む」という行為をした、または、先生に「休む」という事態が生じたという解釈である。(19b) も同様の解釈である。つまり、ラレルによって表されているのは、tr の行為が意図的ではないという認知主体の読み込みである。動詞の非対格化と呼んでもよいかもしれない。尊敬の意味は、この非対格化を足がかりにして出現したと考えられるのである。

(19) a. 昨日、先生は休まれた。
　　 b. 先生は毎晩健康のために歩かれている。

一旦、このような構文の意味が確立すれば、他動詞構文などにも適用できるようになると思われる。図 12 は尊敬の事態把握を表しているが、図 12 において認知主体 C から伸びている太線の破線矢印は tr に対する敬意を表している。この事態把握は認知主体の「見え」の世界を描いているので主観的状況を表す SS 内にすべての参与者が位置づけられる。

(20) a. 先生はよく映画を見られる。
　　 b. 先生はいつも学生たちを叱られる。



(b) 尊敬（自動詞）　(b) 尊敬（他動詞）

図 12

それではなぜこのように非対格化することにより、尊敬の意味が生じるのであろうか。つまり、tr の非意図的な行為であることをラレルが表したとしても、それがどのように尊敬の意味を表わすようになるのかが説明されなければならない。実は、非意図的な行為とすることで tr の責任の所在を隠すことが尊敬の意味が生じる直接の原因である可能性がある。なぜかというと、ラレル形以外の尊敬を見ると日本語では尊敬対象の責任をぼやかすことがよく見られる。例えば、日本語では (21) に見られるように、「お～になる」という形式でも尊敬を表すことができるが、これもまさに、非対格化であると考えられる。このように「～になる」がつくと、ガ格参

与者を動作主として解釈できなくなる。(22) では、「授業」は動作主ではなく、主題 (theme) である。これと同じように、(21) ではガ格参与者である「先生」は「休む」「叱る」という事態の動作主ではなく、主題のような存在であることが示されている。

(21) a. 昨日、先生はお休みになった。
b. 先生はいつも学生たちをお叱りになる。

(22) 授業が休講になった。

以上、本節では、ラレル構文の多義性を見てきたが、認知文法の枠組みに沿って詳細にその認知的メカニズムを検討することによって、少なくとも説得力のある議論が展開できることが示された。

6. まとめ

本研究では、日本語を特徴づける際に観察される事態内視点とそれを表す用語を Langacker の認知文法の枠組みに位置づけるために、自己中心的視点配列モデルの修正を図った。Langacker の枠組みに固執する理由は、それぞれの研究者が別々のことばで語るのではなく、相互に意思疎通可能な道具立てで有意義な議論をするためである。そして、Langacker の枠組みが最も厳しい制限の下で定式化され、図式を描くこと自体が発見的 (heuristic) な意味を持っているからである。ここで提案した図式によって、日英語の類型論的特徴を明示的に記述できることが示された。そして、この図式を用いることによって日本語のラレル構文にも認知的な説明が与えられることを示した。重要なのは、言語表現の意味を厳しい制約の下で図式化することである。これにより、実りの多い発見が可能となるのである。

参 考 文 献

Croft, William (2003) *Radical Construction Grammar*, Oxford University Press, Oxford.

深田智・仲本康一郎 (2008)『概念化と意味の世界』研究社, 東京.

福井直樹 (2001)『自然科学としての言語学』大修館, 東京.

本多啓 (2005)『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会, 東京.

池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会, 東京.

影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版, 東京.

川村大 (2004)「受身・自発・可能・尊敬－動詞ラレル形の世界－」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』尾上圭介 (編), 朝倉書店, 東京, 105-127.

Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification, *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.

森山新 (2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房, 東京.

中村芳久 (2004)「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論Ⅱ』中村芳久 (編), 大修館, 東京, 3-51.

中村芳久 (2006)「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『言語』2006 年 5 月号, 74-82.

山梨正明 (2009)『認知構文論』大修館, 東京.